

のびのび空間、わくわく世界、 次から次の過程を育む「まちの縁側」

「コミュニティ再生・再創造のアプローチ」

延藤 安弘

Written by Yasuhiro Endoh

「コミュニティの関係性づくり」

「まちの縁側の役割」

天草の海と陸が溶けあうある離島を訪ねた時のこと。小生の名刺を受け取った町役場の課長さんは、NPO「まちの縁側育くみ隊」の文字に眼をやりながら、けけんそうに「まちには、もう縁側がなくなつたんでしょっ？」と問われた。「そうです。ヒトとヒトの間がキレギレになつて、今、地域社会に縁側をよびさます願いをもつて『まちの縁側』を掲げています」と返す。「この島の家々には今も縁側があり、私も仕事が終わると、ポットと縁側に座り、道行く人あれば、お茶をどうぞ、酒を飲もつ」と呼びかけ、くつたくなひ話し合いと笑い声が、その場に響き始め

ます」と。その言葉を裏書きするかのように、島の年寄りたちが大木の影に身を寄せつづひたすら静かに沖を眺めている風景に出会つた。日本の生活空間の原点を垣間見る思いであつた。

ところで近代社会は、機能優先の便利な生活と標準的な空間を全体におしひろげたが、その「豊かさ」とは裏腹に、人間の重要な営みである多様な「コミュニティ」の意味をかき消してしまつた。機能によつて意味が細上げされることをこえて、生きる意味を深く多面的に反芻する状況づくりは「二世紀の課題である」「モノ・カネ・セイド」優先をこえて、「ヒト・クラシ・イノチ」尊重の意味ある、生の実感のある「コミュニティ」を回復・再創造していくための有効なキーワードが、まちの縁側である。

成長・開発主義が担つた時代精神は、モノの豊かさ「志向にあつたが、これに対して、成熟社会に

おける持続可能なまち育て「サステイナブル・コミュニティ」を担つた時代精神は、「口の豊かさ」志向である。人々の生きがい「口」を豊かにするまち育て・まちづくりでは、人々が信頼や相互主義や共通理解を生みだす、眼に見えない関係性の価値としての「ソーシャル・キャピタル」社会関係性資本が不可欠である。

「ソーシャル・キャピタル」は、「コミュニティの関係性の資本である」¹⁾。縁側が、かつてさりげなく状況づけられた「コミュニティ」の関係性づくりの地域資源であつたことに着眼するならば、新しい状況のもとで「コミュニティ再生・再創造の仕掛けとして、まちの縁側」の育みは、これからいふその重要性を帯びてくる。本稿のねらいは「ソーシャル・キャピタル」「コミュニティ」の関係性づくりとしての「まちの縁側」の必要性和可能性を明らかにすることにある。



まちの縁側MOMO



MOMOの中の元診療空間

「ヒト・モノ・コト」のつながり — のびのび生活空間 —

「まちの縁側」には「コミュニティの関係性の資源」として三つの側面がある。ひとつは「ヒト・モノ・コト」のつながり、人間・空間・活動の同時性の資源である。「まちの縁側」とは、小規模多機能混在交流の場として空間とふるまいと言葉とその人間とが一体化した小さな「コミュニティ」である。

そこでは、「ここに」とキモチがいい、「あそこに行く」と、何か「ここ」に出会えるかもしれない」という身体感覚を大切にしたいヒトが寄ってくる。そこには一人ひとりの居場所としてののびのび生活空間が生成していく。

「まちの縁側」は、地域で打ち捨てられている空き地・空き家・空き店舗・空き教室などを、人々

が安心できる居場所として、または何が起こるか分からない偶発性の恵みがやってくる居場所として育んでいく。人々の愛着がこもった利・活用によって、古いまじれた空間や、ヒト・モノ・コトのつながりの中で、人々のくらしと「コミュニティ」への思い出が、よみがえっていく。ヒト・モノ・コトのつながりのよい出合いのデザインは、かわる人々の記憶にとどまり、新たな思い出を育んでくれる。

「まちの縁側」は、新しい場所をつくる時も、古い空間にも人々の活用の息吹を高め、内と外の間に、おだやかなつながりのある、のびのび生活空間としての縁側がもたらす必然性の場である。

生きる意味の創出 — わくわく生活世界 —

「まちの縁側」が「コミュニティの関係性の資源」として役立つ第二の側面は、つながりが生む感動を表現することによって、人々の内側に生きる意味を創出することである。

そこでは多様な人々が出会い、交流し、時にはともにお茶や食事を楽しみあい、時には制作・表現体験をわかちあふ。その際、まちの縁側」で出会う人々は、言葉により思いを交換しあい、触発しあふ。時には、多彩につくられたもの・作品や多様な表現行為などを、共にほめあい、違いを認めあい、相互に照らしあう関係が生まれていく。

表現活動を通して、生の実感の高まりをわかちあい、相互に見つめあう、re-spectする相互に敬愛しあう関係が紡ぎだされる。縁側の出会いと交流と表現の場には、一人ひとりがまわりと豊かにかかわる「生活世界」が広がっていく。

生活世界が広がっていくとは、「われわれは立ち、座り、歩き、横たわる。われわれは空間を時間の中に生き、見、聞き、触れ、味わい、匂いを嗅ぎ、そしてお互いに、また第三者も、さまざまな状況を感じる。われわれは思い出し、考え、想像し、注意し、（どれか）の感覚であるいはすべての感覚で（感じ、行い、話し、お互いに出会い、熟考し、驚き、疑い、信じたり信じなかつたり、愛したり、悩んだりし、やりぬいたり、諦めたりする）」⁽³⁾ 状況のことである。

人々は、まちの縁側」で限りなく多様なヒト・モノ・コトのつながりの中で、生の豊かなふくらみをはらむ、わくわく生活世界に身をおくことになる。そのことにより、高齢者も子どもも誰もが生きる力を内から育むとともに、相互主義や相互信頼の関係が紡がれていく。

つながりのつながりとしての可能性 — 次から次への過程 —

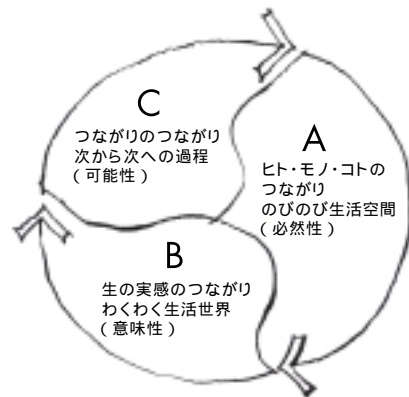
「コミュニティの関係性（ソーシャル・キャピタル）」としての、まちの縁側」の、第三の資源の側面とは、状況をゆるやかに変える発想・イメージを喚起するメタファー・隠喩としての想像力である。

すでに触れたように「ヒト・モノ・コト」の「まち」の「まちの縁側」は、人間を属性別に区分けする機能的三次元空間をこえて、小規模多世代異機能融合のある身体性をはらむ高次元空間を目指す。

「まちの縁側」は、何のための縁側か「のコンセプトや、その個性的実現過程を生命のよう大切に。人間・空間・活動の同時性としての「まちの縁側」は、皆みの場所特性を、次から次へと変化させていく。例えば、名古屋にある「まちの縁側MOMO」は、除去寸前の古い歯医者さんの診察空間を繙い、装い、人々の出会いと交流の場所となつていった。「縁側サミット」や多様な制作・表現活動とその成果を展示し、人々の共感をわかちあふ柔らかな場所になつていった。中庭の奥にある物置がNPOの「パン作業空間」に姿を変えていった。中庭には、ヒトとヒトの出会い、そして風と土と緑がからみあふ手作りの木のテーブル・椅子が整備されていく。そこには、管理をこえる自由な発想がみなぎる場所の力の表出過程がある。

管理システムは、あらかじめ定められた目標や、それを実現する手段に従つたプログラム通りに進行する際につまづき行動するが、逆に、状況の変化や予想をしないトラブルにはいたずらに混乱におちいるデメリットがある。しかし、縁側発想、縁側のメタファーは、管理崩しと管理乗りこえをもたらす。

縁側でお互いがうちとけて話し合えるように、「まちの縁側」は異なつた価値観や経験と持ち味をもつた人々のゆるやかな対話の場所である。対立を力に変えつつ対話に赴く、トラブルをエネ



【図】コミュニティの関係性づくり(ソーシャル・キャピタル)としての「まちの縁側」の3側面



MOMOの中庭

ルギーにすると、いつ発想は広い意味での縁側のメタファーである。現実の市民参画のまちづくり活動やワークショップの現場では、状況によって何が起るかわからない中で、常にアドリブで即興的に、次から次へと状況を聞くことが可能なのは、縁側の想像力・イメージの力のなせるわざである。ゆるやかなかわりと共存状態を設定する縁の発想は、次から次への流れのつながりの可能性を開いていく。因と果が相互依存的な縁起の発想を重視する、まちの縁側「観」は、かわる人々をして、次から次の思いと行動の開かれたプロセスに赴かせる。

以上のように、「まちの縁側」は、ヒト・モノ・コトのつながりのもたらす、のびのび生活空間の必然性と、つながりの表出がもたらす生の実感としての、わくわく生活世界という意味性と、つながりのつながりとして、次から次への過程を開く可能性の三つの側面が、相互に有機的にからみあつて存在価値を発揮する(図参照)。「まちの縁側」は、地域における多様な人と人との間の、のびのびと開かれた結びあい、わくわくの豊かな意味、そうしたキモチのネットワークを連鎖的に実現する「コミュニティの関係性・ソーシャル・キャピタル」である。

地縁と志縁を支援する

のびのび生活空間、わくわく生活世界、そして次から次への過程が相互にからみあつていくことにより、地域の人々の間に信頼の織物が紡がれて



MOMOでの打ち合わせ

いく、「信息」の「コミュニケーション」がはずんでいく。

「信息」とは、中国語の情報にあたる。日本語の情報に事実を伝達する機能的意味あいがあるのに対して、中国語の「信息」は、文字通り「相互の息づかいを信頼する」という意味をはらむ⁽⁴⁾。

現代「コミュニティ」の創造とは、みんないつしよの価値同一性のもとに閉じられたものではなく、違うみんなが差異を相互に受け入れ、「口」を合わせ、「口」・「口」のつながりの経験や表現や交流がふりつる中で、「相互の息づかい」を信頼する「関係が育まれていくオープンエンドなプロセスである」。「まちの縁側」はそうした地域市民社会づくりを目指すものであるが、その際、標準や管理システムが捨象してしまいがちな「口」で「マイナーな異質性の営み」を大切にすること。

各地域で生活・福祉・環境・教育・文化・景観・住居・まちづくりなど領域横断的で多様な「まちの縁側」的場所と活動が深まりと広がりをもたせていくためには、

地縁と志縁の結合を支援する仕掛けが重要である。

地縁は、いうまでもなく日本の地域社会に遍く存在する自治会・町内会などの在来的な地縁組織のつながり、あるいは日本人が生まれながらの地縁を「コミュニティ」と考

えることをさす。

志縁とは、指揮命令系統によらない、自発的に生き生きとした私発協働の志のつながりである。あるいは私を活かして「公」を開くこと、即ち「活私開公」の視点のことである⁽⁵⁾。「まちの縁側」は、のびのび、わくわく、次から次への縁のつながりへの志を高めていく過程である。それは在来的な地縁を活かしつつ、新しい時代の流れとしての志縁を重ねあわせていくことによりて成立する。

二〇世紀は全体に管理社会をおしひらげ、今日、その制度疲労が目立っている中、二一世紀は相互支援社会の到来が待たれている。二〇世紀の相互支援とは、支援者と被支援者をセクトとしつつ、しかし支援が一方的関係ではなく、他者の「エンパワーメント」自己の能力を高める（を通じて、自他の相互実現をはかることである）⁽⁶⁾。「まちの縁側」の創発は、かわる市民・NPO・専門家などの間に、相互支援・相互敬愛の関係が生きていき進む過程、あわせて、行政がそれを多面的に評価・支援・援用していく過程如何にかかっている。

おわりに

私たちNPO法人まちの縁側育くみ隊は、本稿で素描した「まちの縁側」像を担う全国各地の多様なケースに出会い、「まちの縁側」創発をくらし「コミュニティ再生へのアプローチ」について

ことを願っている。その視点から「まちの縁側認定制度」をおこしていく。全国で「まちの縁側」を登録することにより、多くの市民が知り、利用できるようにする。さらには「まちの縁側」のない地域で新たに作る際も、それを生み出す術を伝えるようにしたい。関心のある方は次にアクセスしてくださいと幸いです。

【NPO法人まちの縁側育くみ隊】

e-mail: info@engawa.ne.jp
HP: <http://www.engawa.ne.jp>

参考文献

- (1) 新版「コミュニティ・ソリューション」金子郁容 岩波書店 二〇〇二（一五八頁）
- (2) 季刊「まちづくり」第六号 特集「まちの縁側を育む」延藤安弘 浜崎裕子・倉原宗孝 学芸出版社 二〇〇五・三
- (3) 生の真実・R・D・レイン 坂本嘉孝・立原嘉記訳 みすず書房 一九七〇（三頁）
- (4) 自己組織性と社会・今田高俊 東京大学出版会 二〇〇五（一七四頁）
- (5) 同書（二六七頁）
- (6) 同書（二四七頁）

□ 延藤 安弘（えんどう やすひろ）

愛知産業大学大学院教授、NPO法人まちの縁側育くみ隊代表理事。一九四〇年大阪生まれ。北海道大学工学部建築工学科卒業、京都大学大学院修士、工学博士。京都大学助手、熊本大学教授、千葉大学工学部都市環境システム学科教授を経て現職。著書は「こんな家に住みたいナ―絵本にみる住宅と都市」（晶文社）、「何を指して生きるんや」人が変わればまちが変わる（プレジデント社）、「まち育て」を育む：対話と協働のデザイン（東京大学出版会）など。